

## 「種」(注)の約束

2009年12月20日 アシェル・イントレーター

注: "the seed"の訳は創世記3章では「子孫」で、メシアを指します。文章構成上、また文脈上分かりやすくするために、the seedとある訳語として「種」とカッコ付けにします。(日本語には定冠詞がないための処置)

アダムとイヴが罪を犯しサタンの王国の元に墜ちた時、神は「女の子孫(seed)」(創世記3:15)と呼ぶ方を通して地を贖うことを約束されました。イヴには二人の息子がいました。サタンは明らかに約束の「種」(を持ち運ぶ人: 訳者加)はアベルだと思い、カインに働きかけて彼を殺させました。(創世記4章)サタンが罪人を誘惑し義人を殺すことができる限り、全地を支配し続けることができます。

そこで神はイヴにアベルに代わるもう一人の息子/「種」を与えました。彼の名はセツ(創世記4:25)でした。世界の中において約束の「種」を得る戦いが始まったのです。

セツの子どもたちの中からアブラハムが現れました。神は彼と契約を結び、約束の「種」は彼の子孫たちを通してもたらされると約束されました。アブラハムの「種」は全地の所有権が与えられるのです(創世記12:7, 13:15, 15:18, 17:8)。そして彼を通してすべての国々が祝福されるのです(創世記12:3; 22:18)。

この「種」の約束はイサク、そしてヤコブに継承されました。全地を所有するためであり(創世記24:7; 26:3; 28:4; 28:14; 35:12)、諸国を祝福するためです(創世記26:4; 28:14)。

全地と人類の贖いは契約によってこの「種」に継承されました。それゆえ、アブラハムとその子孫たちはその「種」そして契約を守らなければなりません。もしそうしなかったら、全地と人類は滅びていたでしょう。

アブラハムはイサクからイシュマエルを離さなければなりません。それは、イサクがイシュマエルより良かったからではなく、アブラハムとサラの結婚の契約ゆえでした。神はイシュマエルを祝福することができましたが、契約はイサクを通して継承されなければなりません。

アブラハムとイサクは自分たちの妻を他の男に与えるというひどい誤りを犯し、「種」と契約両方を危機に晒しました。罪のない部族を殺す危険を冒しつつも、神は奇跡的な介入なさって「種」を救いました(創世記12:10-20; 20:1-9; 26:7-11)。

エサウは約束の「種」を得る権利を含む長子の権利を売るという誤りを犯しました(創世記25章)。その時から、神はエサウが年長であったにもかかわらず、ヤコブの契約の権利を尊重する必要がありました。

たとえヤコブがリベカをより愛していたとしても、そしてヤコブが騙されてレアと結婚したとしても、ヤコブがレアと結婚した時、契約は彼女の息子たちに継承されました。レアの最初の息子ルベンは性的不品行ゆえに長子の権利を失いました。次男と三男であるシメオンとレビは暴力ゆえに権利を失いました。こうして契約は四男であるユダに継承され、彼がベニヤミンを救うためなら自分の命を差し出した時、その権利継承が確立したのです(創世記 44:33)。

ディナがハモルと関わった時、契約の「種」は危機に晒されました。その結果としてシェケムの部族は無惨にも殺されてしまいました。それは一方大いなる罪でしたが、その反面その「種」に至る系図を守ることとなりました(創世記 34 章)。

ユダはカナン人のバット・シュア(訳注:シュアの娘)をめとることによって契約の「種」を失いかけてました。贖いの計画はタマルによって、彼女が「遊女のふりを」しなければならなかったとしても、それは救われたのです(創世記 38:26)。「種」は双子の兄弟ゼラフを割り込んで(パラツ)長子の権利を獲得したペレツに引き継がれました。

モーセの時代、アブラハムの子孫たちはあまりにも数が多くなったので、サタンは誰を殺せばよいのか分からなくなりました。そこで、サタンはすべてのヘブライ人の男の子を河に投げ込むという戦略を考え出しました(出エジプト1章)。

ユダヤ民族を殺す同じ悪魔的な計略は、**エステル書**にあるユダヤ人を殺そうとしたハマンの試み、罪のない幼子を殺したヘロデ(マタイ 2:16-17)、ナチによるヒトラーの大虐殺、そして現代のイスラムのジハード(訳注:聖戦)による試みにも見ることができます。ハマンとアフマディネジャドとの間に霊的なつながりがあり、両方ともイラン(ペルシャ)の政府の長です。

レビ記にある結婚間の純潔に関する掟は来るメシアを守るためにありました。割礼は約束の「種」を守る契約による神のご計画の印でした。

バラムの指示によるモアブ人の女性たちとの姦淫ゆえに「種」は滅ぼされそうになりましたが(民数記 25:1)、後に義なるモアブ人女性であるルツによって救われました。ルツはボアズを通して「種」を継承する者となりました。ボアズからオベデ、エッサイ、そしてダビデが生まれたのです(ルツ 4:21-22)。

ダビデは神から契約を通して子孫の約束を受け取りました(II サムエル 7:14)、しかし、バテ・シェヴァとの姦淫によってその約束を損ないかけました。その姦淫によって生まれた息子は死にました(II サムエル 12 章)。しかし、ダビデの悔い改めが契約を回復させました。バテ・シェヴァを通じたダビデの二人目の息子は「種」の約束の相続人となりました。

悪のアタルヤは王族のほとんどを殺してしまいましたが、敬虔なエホシエバは最後に残った息子であるヨアシユを、アタルヤの手から救い出すことに成功しました(Ⅱ列王記 11:1-2)。

エズラは不品行と異教徒同士の結婚から約束の「種」を守るために戦いました(エズラ 9:2; 9:8; Nehemiah 9:2)。

聖書の歴史を通して、一方では殺戮による攻撃、もう一方では性的不品行による攻撃がありました。もし「種」が滅ぼされてしまったならば、神の贖いの計画は頓挫したことでしょう。新しい契約の核心として、ユダヤ人は保もたれなければならない、もしそうでなければ、創造そのものが破壊されてしまうであろうと述べられています(エレミヤ 31:31-36; 33:20-22)。

新約聖書の最初の章はアブラハムからダビデ、そしてイエシュア(イエス)に至る約束の「種」がどう継承されたか辿っています。現代の正統派の女性は来るメシアを今も待っています。なるべく多くの男の子を産むことを望み、その内の一人がメシアであることを望みながら。

いろいろな意味において、ダビデの家に連なる若い乙女ミリアム(マリア)がベツレヘムの外で出産し飼葉桶に寝かした時、すべてのユダヤ人の女性の希望は 2000 年前に成就しました。私たちは正確な日は分かってはおらず、クリスマスの商業化が受け入れがたいものとなったとしても、メシアの誕生はすべてのユダヤ祝祭日の中で最も大いなるものとすべきだと思います。その日、私たちの民は人類に代わって贖いの「種」を守るという契約における神のご計画が成就したのです。